研究活動報告

メディア・シティズンシップ研究所研究活動報告
＜シンポジウム「つくば写真美術館再考―美術品（アート）としての写真を問い直す」成果発表に向けて＞

メディア・シティズンシップ研究所
招聘研究員　小　林　　杏

今年度、2010年に行ったシンポジウム「つくば写真美術館再考―美術品（アート）としての写真を問い直す」報告書を発行した。これは、当研究所の多岐にわたるメディア研究の一つとして、現在私たちの生活に欠かすことのできないメディアとなっている「写真」について考える試みとして企画されたものである。

現在、写真は我々の生活に溢れている。私的な記録、公的な記録、商業分野、どれをとっても、おそらく写真を目にしない日はないだろう。そのような実用的な側面に加え、写真には「美術品」としての顔がある。撮影者が「写真家」と呼ばれ、美術館で展示され、売買される。そのことにはもはや違和感はない。しかし、日本においてそのように写真が「美術品」として扱われるようになったのは、実は比較的近年のことである。1960年代後半までは、今でいえば「作品」である写真そのものには、まったく価値が置かれていなかった。写真は印刷原稿とみなされ、印刷がすめばそのまま出版社のロッカーに乱雑に詰め込まれる……そんな風景が当たり前だったのだ。今のように写真プリントが売買され、写真が美術館に展示されるに至るには大きな価値観の変化があったはずである。そして、我々は1985年のつくば写真美術館が、その変化に一石を投じる重要な契機となったのではないかと考えた。

つくば写真美術館は、1985年のつくば万博に関連して設立された、日本初の写真専門美術館である。期間限定で、また収益的に赤字となり残ったカタログは断裁処分されたため残存するカタログも少なく、これまであまり大きく取り上げられることがなかった。しかし、写真専門美術館がまだ存在しなかった時代（東京都写真美術館が本格開館するのは1995年になってからである）において、期間限定とはいえ写真だけの美術館がオープンしたこと、そしてそこで『パリ・ニューヨーク・東京』という大々的な企画展示が行われたということは、画期的なできごとだったと言えるだろう。

この美術館の発案者は、日本で最初に写真を扱った商業ギャラリー、ツァイトフォト・サロンの代表である石原悦郎氏である。さらに、その際石原氏が集めた当時の若手キュレーターメンバーの顔触れは、現在では写真の第一線で活躍する人々（飯沢耕太郎氏、伊藤俊治氏、金子隆一氏、故・平木収氏、谷口雅氏、横江文憲氏）であり、この美術館が、写真に関わる「仕事」の現場において人的ネットワークの形成も含め、重要な機能を果たしたことが予想できる。当日は、故・平木収氏、ご都合が悪く出席いただけなかった伊藤俊治氏を除き、石原氏とキュレーターグループの全員の方々にご登壇いただくことができた。「つくば写真美術館」をめぐる彼らの体験、当時の写真の置かれた状況とその後の変化などについての証言は、日本写真史の重要なシーンを語るものだ。また、座談会の質疑応答では客席から鋭い質問が

飛び、当研究所の「メディアの現場と研究者、そして市民をつなぐ」という当研究所趣旨がまさに生き生きとした新たな交流として実現した。

当研究所の写真研究は、写真が「芸術」であるという前提で進められる美術史的な写真研究路とは一線を画するものである。写真は我々の生活の至る所にある。写真には無数の顔がある。その中の一つである「芸術」という側面を自明視し、生活に溢れる雑多な写真の姿を切り捨てることは、写真の実態を切り捨てることである。写真はどのように我々の生活の中にあり、どのような影響を持っているのか。写真というメディアの様々な側面を一つずつ取り上げ、問い直していく試みが、写真研究には必要なのである。

当研究所では現在、この報告書を礎として、書籍の出版を準備中である。つくば写真美術館をめぐる記録・研究であるだけでなく、今、そして今後の写真というメディアについて問いを提示するものとして構想している。報告書に掲載した、シンポジウム企画メンバーによるコラムをさらに充実させるとともに、数名のパネリストにメンバーが再度インタビューを行い、「今、そしてこれから」の写真についての議論を交わす予定である。それは写真が劇的な変化を遂げてきたこの20年を第一線で走り続けてきたパネリスト各人と、日に日に捕えがたく変化を遂げている写真というものを今、あえてテーマとする若手研究者たちの、世代を超えた対話の場でもある。また、この書籍は、写真に関心のある広い層の読者に向けられている。メディアの現場と研究者（学生）そして市民、をつなぐ、という研究所方針にも即したこうした試みを通じて、日ごろ自明のものとなっている「写真」というものに改めて目を向け、未来に向けて更新していく新しい写真研究の一歩を進めたいと願っている。